【研究ノート】

農村題材小説座談会①について

名 和 又 介

一

農村題材小説という言葉の用い方は，1980年以降とりわけ農村題材小説座談会が開かれてから多く用いられるようになった。この言葉は厳密に定義して使われている訳ではなく，農村を題材とした小説或いは農村生活を描いた小説というほどの意味であろう。ここ数年来，各地で農村題材小説座談会が頻繁に開かれている。座談会が開かれた背景は何か，又座談会は何を提起し，その提起は如何に受取められたかを検討するのが，小稿の目的である。中国の当代文学の中で，農村題材小説の獲得した成果は何人も否定しえないほど大きい。又，現在及び将来，農村題材小説の果たす役割も限りないものがあるだろう。現時点で，農村題材小説座談会の検討を通して農村題材小説の過去の成果と今後の帰趨を確かめることは，それなりの意味があると考える。

農村題材小説座談会開催一覧表

日時		場所	主催者	その他
'80	(イ)	北京	《文芸報》編集部	
	(ロ) 1月上旬		作協河南分会と《奔流》編集部	
	(ハ) 7月10日～20日	太白県	《延河》編集部	
	(ニ) 10月15日～22日		《汾水》編集部	
'81	(ホ) 5月	太原	作協山西分会と《文芸研究》編集部	
	9月29日	北京	中国作家協会	報告会
	(ヘ) 10月9，10日	長沙	《文芸報》編集部	

'81	(ト) 10月30日 11月5日～12日 —— —— ——	西　安	《文芸報》編集部 中共中央宣伝部	文芸創作座談会 「農村題材創作筆談会」(《汾水》3, 4, 5期) 安徽省許多作家下郷深入生活(《光明日報》7月3日) 省文聯組織作家深入閩北参観訪問(《福建文学》11期)
'82	(チ) 2月25日～3月6日 (リ) 4月	襄樊市 渦　陽	作協湖北分会と《長江文芸》編集部 《安徽文学》編集部と阜陽地区文聯	
'83				
'84	(ヌ) 3月1日～7日 (ル) 3月22日～27日 (ヲ) 4月下旬 —— ——	河北省涿県 襄樊市	《文芸報》編集部と《人民文学》編集部 作協陝西分会 《長江文芸》編集部	同時期に《電影中心》主催の座談会 「怎様表現変革中的農村生活」(《文芸報》4, 5, 6, 7期) 「農村変革与文学創作」(《山東文学》8, 9, 10期

二

1980年から1984年にかけて開かれた農村題材小説座談会を表にすると上記のようになる。1983年は空白になっているが，同座談会を捜し出せなかったためである。座談会が開かれていない可能性もある。5年の間に座談会で提起された諸問題には多少の性質の相違が見られる。1981年と1982年の間で，前期と後期に分けられよう。前期と後期の違いは，前期が過去の反省を踏まえた問題提起の発言が多いのに対し，後期は，「如何に変革中の農村生活を表現するか」という≪文芸報≫の表題から察せられるように，問題は変革中の農村生活の描写という一点に尽きる感がある。とは言え，前期と後期が，この1年で截然と区別できるという訳ではなく，相反する性質の発言も各処に見出せる。この境界はあくまで便宜的なものであることをお断わりしておく。

最初に開かれた農村題材小説座談会は，作家協会河南分会と≪奔流≫編集部の主催になる(ロ)の座談会である可能性が高い。しかし，それは時間的に早かったというだけで，以降の農村題材小説座談会をリードしてゆくような性質のものではなかったと思われる。実質的な農村題材小説座談会の嚆矢は≪文芸報≫編集部の主催する(イ)の座談会であり，開会宣言に相当するものは劉錫誠（≪文芸報≫編集部）の「想着農民，記着農民」（≪文芸報≫1980年第5期）であろう。これは，農民問題が重要な地位を占める中国文学の特殊性を述べ，過去の成果と比較して最近3年間の農村題材小説の貧困とその原因を説き，最後に，作家を励ます進軍ラッパを鳴らすという内容になっている。

農村題材小説座談会の主催者を見ると，≪文芸報≫編集部が多く，主要な座談会もほとんど主催していることから，この運動の主導権を有していたのは≪文芸報≫であるように見受けられる。それに協力したのが，農村題材小説では伝統を持つ山西・陝西省の作家協会や≪汾水≫（後に≪山西文学≫と改名），≪延河≫などの編集部である。1981年の農村題材小説座談会の会場となった太原・西安・長沙が，趙樹理，柳青，周立波の作品舞台（の省都）であるのも偶然ではないだろう。

三

1980年の座談会(イ)(ロ)(ハ)(ニ)には，農村題材小説の質的・量的貧困を指摘するものが多い。その原因として，既成作家は文革十年の傷痕を描くのに急で農村題材小説は視野に入らず，新人作家は都市出身者が多く農民問題は理解不足であると嘆いている。他の原因として――そして，この原因こそ根本的な原因として把握されている訳だが――農村が経験しつつある大変化に作家がついて行けないという問題を挙げている。「目下，我々は新旧交替の社会大変動の時代にいる。社会生活の発展は速く，絶えず新しい情況，新しい問題が生じている。農村生活の中の多くの重要な問題を，我々は研究しなければならない。出来合いの答案を受入れるのに慣れた時代

はもう二度と戻らない。」(「想着農民，記着農民」劉錫誠)

(ハ)(ニ)の座談会の要約から，作家の不安と困惑の様子が見てとれる。「中国式の農業現代化を実現する道は一体何か。当面の党の農業政策は小休止の一時的処置なのか，それとも社会主義農業建設の根本方針なのか。農村は大勢に影響力を持つが，農民の運命に係わる最大の矛盾は何か。」「農村経済構造の急激な変化や，方針・政策の不安定さにより，まず何を書くかで困るし，題材に手をやく。」前述の引用と並べてみると，出来合いの答案が出ないで困惑しているように見える。当時困惑していたのは作家だけではなく，作家を指導する立場にある文芸工作担当者（宣伝部・文化部の役人）も困惑していたであろうし，更には農業工作担当者ですら困惑していたという状況があった。

ここで当時の農業政策の軌跡を追う必要が出てくる。

農業政策の転換に伴う農村の変化は予想を上回るものがあるようだ。農産物買付価格の引上げで一息ついた農民は農業生産責任制を大幅に採用し，数年で生産責任制の一種である包産到戸・包幹到戸[③]と雪崩現象を起こしている。1980年段階で問題化したのは包産到戸が集団経済の解体につながるか否かという点である。人民公社の幹部や県の幹部達が農業生産制度の転換に積極的でないという側面もあり，集団経済は包産到組までにとどめたいという意図もあったようだ。しかし，「農業生産責任制を更に強化し改善するいくつかの問題について」[④]と題する中共中央の文件が出るに及び，包産到戸は集団経済の一運営形態であるとされて結着がついた。

事態は更に進展し，翌年の文件では，農牧工商総合経営の道（多角経営）と農村商品流通経路の疏通（流通ルートを多くし流通段階を少なくする）を提起し，多角経営を発展させることにより商品生産の拡大を計り，農民を商品経済の渦の中に巻込むことの必要性を説いている。1982・83・84年も同趣旨の文件が出され，前述した政策の踏襲とより一層の発展が述べられている。「82年の1号文件は我々が豊かになるよう扉を開いてくれ，83年1号文件は我々が豊かになるよう道を指し示してくれ，84年1号文件は

我々に心おきなく豊かになるようにしてくれた。」(ヲ)

しかし，前述した政策の実施に当たっては，相当の抵抗と妨害もあったようである。例えば，1984年の1号文件は，相反する性質の文書が1号文件として各地方で出回っていたという事実があり，この種の抵抗と妨害は農村に測り知れない混乱を招いたものと思われる。

さきほど，作家の不安と困惑の様子を述べたが，1980年は生産責任制の可否をめぐって激論の闘わされていた時期なのである。中央文件が出て一応の結着がつくのが10月であり，末端まで浸透するには更に時間を要したであろう。(「陳奐生包産」に登場する周書記は生産責任制を劉少奇路線と批判していたのだが，1980年の末には豹変している。) 更に，それに対する抵抗や妨害も考えると，この年は混乱に継ぐ混乱の年であったと思われる。劉錫誠は「出来合いの答案を受入れるのに慣れた時代はもう二度と戻らない。」と立派な言葉を述べているが，実際は「出来合いの答案」を作ろうにも作ることができなかったというのが実情に近いのではないだろうか。

四

1981年に入いると，生産責任制の導入をめぐる疑問は一応収まり，多角経営の提倡とそれに伴う自留地の最大限度枠も設けられて農村は相対的な安定期を迎える。(ヘ)の座談会で，劉錫誠は農村題材小説の問題を三点にわたって述べている。

(1) 作品の公式化，政策図解化

(2) 題材の狭さ

(3) 社会主義新人の描写

以下，順を追って，それぞれの問題を見て行くことにしたい。

1980年の農村題材小説の質的・量的貧困から，1981年の公式化・政策図解化への指摘と，如何にも中国らしいとしか表現のしようのない変化である。「現在，農村題材小説の『熱気』が出て来て，佳品も少なくないが，

『新たなる常套』や『潮流にのる』も現われ，以前の『三突出』や『中心を書く』などが蘇生したようだ。」（㈥韓少功）

公式化・政策図解化と言われているものの内容は，「ある隊或いはある家庭が元々どれだけ貧しかったか。生産責任制を実行してから社員のやる気が高まり，一年で収入はどれだけからどれだけになり，皆裕福になり，服を買ったり家を建てたりテレビを買ったり等々。」（「田野上吹来一股清新的風」段儒東）[5] であるようだ。具体的な作品を取上げて逐一説明しているものに，姚虹の「老調重弾：写出“這一個”的“怎様做”[6]」があるが，彼は「作者達は農民の物質生活の追求に観察と描写を集中しすぎて，現在の農民の精神世界の微妙な変化と発展の掘下げには相対的に熱心でない。」と感想をもらしている。

公式化・政策図解化の問題は，その責任を作家だけに押しつけることはできない。批評家もその責任の一端は担わねばならない。作品の批評は，文芸講話の政治第一，芸術第二の方法が否定されながらも，尚旧套を守り，政策図解式のものが数多い。「陳奐生上城」や「郷場上」の批評が主人公の経済的余裕しか語らないのであれば，そこから導き出されてくるものは証明文学の大量生産でしかない。作家・批評家より更に責任の重いのは，文芸工作担当者であるのは言うまでもない。中国の文芸組織或いは文芸体制そのものが，作品の公式化・政策図解化を導き出すとも思われる。

題材の狭さの問題は，(1)の作品の公式化・政策図解化とも係わる問題であろう。作家が生産責任制の成功と物質生活の向上のみを描くならば，題材の広がりようもない訳である。劉錫誠の指摘するものは「農村での対人関係・社会関係の変化，工業農業間の関係，国家・集団・個人の間の関係，指導者と大衆の関係，家庭関係，世代問題，結婚問題，倫理道徳関係，社会主義思想の農村での影響など」である。後期の座談会で関心が集中するのは，倫理道徳問題なのだが，ここでは農村の問題を全面的に検討した後の一問題として理解されている。題材拡大の指摘は，同時に当時の農村の抱えていた諸問題の指摘にもなっているので興味深いものがある。引用を

続けると，他に「五保戸（衣料，食料，燃料，教育，埋葬の保護を受ける身寄りのない家庭），四属戸（軍人，戦没者，幹部，労働者の家庭），民辦教師（民営校の教師），産児制限，水利灌漑，大型農機具の分配，集団財産（倉庫，森林，大隊所有地）の管理と保護などの問題」（㈩潘吉光）や「鎌，天秤棒，あめ牛，わらぶき屋は到る所にあるし，家父長制，鶴の一声，買売結婚，神頼みや占いもある。」[7]「努力反映農村的新変化」陳残雲）の指摘もある。㈭の座談会では，幹部が千元戸を万元戸に押し上げ，典型にしようとして失敗する例や，集団経営がうまく働いている大隊に包産到戸を押しつけて失敗する例，更には解放以降の農業政策の得失に到るまでが，極めて率直に伝えられている。

題材の狭さの指摘は，題材拡大の声となり，題材拡大の視点は，農村問題の発見へと連なる。農村題材小説座談会の題材をめぐる討論は，一面では農村問題の洗い直しにもなっていたのではないのだろうか。劉錫誠の指摘は「新旧交替の社会大変動の時代」を前提とした題材拡大の方向であろうが，他の指摘は，引用部分を見る限りに於て，今すぐ解決を迫られている深刻な問題や中国農村の持つ封建性・後進性を述べたものである。作家は民辦教師を題材としてもよいし，買売結婚を題材としてもよいのである。（数年来，作家は題材選択の自由がなかったという訳ではなく，座談会で公認された，或いは黙認されたという意味で。）従って，題材拡大の問題は，種々の可能性や意味を有していたと思われる。

ところが，言わば題材の自由化に反対し，劉錫誠の指摘する方向へ枠をはめようという動きもある。「一般的には，やはり現実変革の偉大な闘争は重大題材であり，人々の生活面での日常瑣事は重大題材ではない。重大題材の提唱は時代の要求であり，階級の要求である。」（「漫談題材的“廣”和“厳”」（繆俊杰）[8] 繆俊杰は農村題材小説の分野では発言回数の多い批評家である。一覧表に示した中国作家協会主催の報告会で，生産責任制の成果を手放しで誉めてもいる。農村題材小説の分野で，積極的な役割を果した一人であろうと思われる。後期の座談会では，引用した繆俊杰説の方向

が主流を占めることになる。

社会主義新人の描写とは，四分代の祝辞で鄧小平が触れた「我々の文芸は，社会主義新人の描写と養成にさらなる努力をし，豊かな成果を上げねばならない。」という部分から出ている。座談会の発言或いは批評で触れられるものは，共通して，社会主義新人を描けというスローガンのみである。社会主義新人の定義づけさえ積極的になされていないことから，逆に，その取扱いに困っている人々の顔がほのかに見えてくるような気もする。

五

(又)の座談会では，中国の農村を以下のように理解している。

「中国の農村は，自給・半自給経済から大規模商品生産へと発展し，伝統的農業から現代的農業へと発展する歴史的転換のただなかにある。これは中国の農村が発展する必然的趨勢であり，80年代に中国の農民が経済活動に従事するすべての背景でもある。農村の現実生活の変化はすべてここから生じ，それは又社会経済構造と観念形態全体の一連の連鎖反応を引き起こす。この基本的特徴を把握すれば生活の本質は把握できる。

中国の農村は，自給・半自給の状態から大規模商品生産の場へと転換する過程にある。この認識が事実と符合するかどうかはさておいて，この前提を受入れるとすると，（文芸工作者にとり）極めて都合の良くなる面が多くなると思われる。自給・半自給の農村は過去の農村でマイナス面の代表であるのに反し，大規模商品生産の農村は将来の農村でプラス面の代表となろう。題材拡大の問題で提起された当時の農村の抱えていた諸問題はすべて過去の農村のマイナス面に過ぎず，時間の経過と共に克服される問題となる。作家は民辦教師を題材としてもよいし，売買結婚を題材としてもよいが，それらは重大題材ではないし，「向後看」の文学でしかない。大規模商品生産の農村へと発展する新しい農村，新しい農民を描くことが，重大題材であり，「向前看」の文学であり，文学としての教育作用・認識作用も果たすことができる。

転換の過程にある現在の農民も四タイプあるという。「袋持ち，運転手，露天商人，米作り，即ち工商業に従事する専業戸の農民，運送業を営む農民，商売をする農民，田畑で働く農民」(「"農民" 這個概念変了」康濯)[9]

過去の農村，過去の農民を喚起するものはマイナスイメージである。「彼等は，昔は命令を聞いて働くだけで，どうすれば能率が上がるか知りはしなかったので，働けば働くだけ（事態は）悪くなった。今や，彼等は我々は決して馬鹿ではなく利口だ，我々はあの榆のコブ式の阿Q式旧き農民からは永久におさらばだ，と言っている。」(㈫楚良)「田畑に這いつくばり，艱難辛苦に耐え，絶対服従の農民は，同情と憐れみの対象となり，もう誰も見向きもしない。」(「従阿Q的翅膀下飛出来」楚良)[10] この楚良という人は，新しい農村，新しい農民を描く新人作家で，前述の繆俊杰は高く評価している。[11]

四タイプの農民のうち，前三者は，将来の農村，将来の農民に連なる故プラスイメージ，後者は引用個所に見えるようにマイナスイメージである。後期の座談会で提起されるのは前三者のみで，後者はほとんど問題にされず無視されている感がある。「彼等（専業戸・重点戸）は現代農民の理想と追求，意志と力を代表している。彼等には多くの新しい素質や新しい性格が現われている。彼等は農村改革の場では最も活発な積極的要素であり，社会が注目している焦点である。」㈢

葉文玲は「商業供銷公司」（ホテル；食品・漬物・家具製造・飼料加工各工場を傘下に持つ）の社長の成功談を詳しく紹介し，張一弓は運送業を営む六人のトラック姉ちゃんを紹介し，葉蔚林は責任田を他人に請負わせた長距離輸送の運ちゃんを紹介している。[12] 社長は工商業に従事する専業戸の農民の例，後二者は運送業を営む農民の例であり，先に豊かになった人々なのである。又，1981年以降の文件が提唱する多角経営と農村商品流通経路の疏通に成功した英雄人物である。

大規模商品生産の農村へと連なる行為又は人物が，「現実変革の偉大な闘争」であり，現代の英雄人物である。だから，次のような社会主義新人

の定義が出て来ても不思議ではない。「第一，彼の行為は社会生産力の発展に有利であり，社会主義事業を前進させることができる。第二，彼の思想・品格や精神のあり方は社会主義精神文明の建設に有利であり，人々の共産主義思想を高めるのに有利であること。」(「在生活的大海面前」胡采[18])

六個標準ならぬ両個標準のような文であるが，眼目は「生産力の発展に有利」であるように思われる。第二の点から見ると，思想・品格がいかに優れていようと生産力の発展に有利でなければ社会主義新人ではないのかという疑問が生じる。胡采の答は，当然，社会主義新人ではないということになるだろう。答は出されても，尚疑問は疑問として残るに違いない。後期の座談会などで提起された英雄人物は，ほんの十年前まで非難・打倒の対象となっていた反面人物或いは否定人物なのである。文革中の文芸理論（文芸理論と言えるかどうか疑問だが）が誤まりであったことは理解できるとしても，作家の立場になれば，同一人物を十年前に黒，その後は白，今は紅に描けと言われても，はい，そうですかとはいかないであろうし，浅薄な成金に対する心理的抵抗もなくはないであろう。

(又)の座談会では「商品生産と倫理道徳観念」と題した章を設けて以下のように伝えている。「中国農村の歴史的転換は，経済構造の変化を引き起こしただけでなく，土地観，職業観，家庭観など一連の変化も引き起こし，伝統的な倫理道徳観や審美観は衝撃と試練を受けた。農民の考え方や生活方法にも新たな変化が生じた。文学的視点で如何にこの変化をとらえるか，変革中の人物に如何に道徳的評価を与えるかは，座談会で皆が最も関心を示す話題となった。」

座談会で皆が最も関心を示す話題となったという報告は，作家の困惑を如実に物語るものであろう。しかし，前述した問題は，「伝統的な倫理道徳観や審美観は衝撃と試練を受けた。」と，一刀両断に解決しているのかも知れない。

変革中の農村の現象として，正直者やわきまえのある子より，ずるく，要領のよい子をと願う親の例，米作りから離れ，他の三タイプになりたが

る農民の例，金儲けに奔走する農民の例などが伝えられている。㈲の座談会では，成金の専業戸が年老いた両親に店商いをさせているのは親不孝か否かで議論をしている例まである。印象として，こんな例も，いや，あんな例も，といった茶飲み話のレヴェルであるが，最後は結論で締めくくっている。「過去の考え方や道徳観は“一大二公”を元にして生まれたものであり，今は商品生産を元にした考え方や道徳観を研究しなければならない。そうしてこそ，光り輝く変革の前で迷うことはなくなる。」（㈫王蒙，唐達成）経済第一の視点からすると筋は通っているのかも知れない。しかし，農村題材小説の過去の成果は如何に評価するのか，商品生産を元にした考え方や道徳観とは何かなど疑問は尽きない。光り輝く変革の前で迷わないためにはこう考えなさい，と読むべきかも知れない。

六

四，五で前期・後期の座談会に触れたが，ここでその他についても少し付け加えておく。前期の座談会では，過去の創作方法の反省或いは教訓から，政治・政策から一歩距離を置くという発言が目についた。「目下の創作は農村の具体的政策を避け，政治から少し離れる必要がある。」「我々は過去，政策に密着しすぎて馬鹿を見たので，今後の創作は美学命題から始めるべきで政治命題から始めてはならない。」「政策問題を表現するのでなく，意識形態の倫理道徳，公私矛盾等の問題を描くとよい。」（㈡）「私は過去の誤ちを繰り返したくない。二度と潮流に乗らないし，二度と自分があまり知らないものを書きたくないし，文学を政策図解の道具にはしたくないので，私に暫く深く考える余裕をいただきたい。」（㈠孫謙）

しかし，後期座談会には前述のような性質の発言はなく，逆に，それらを的とした批評的な発言が多い。「我々は，沸きたつ闘争の外に安んずること，傍観者として生活に埋没してしまうことは許されないであろう。」（「投身到偉大変革的生活激流中去」馮牧⑭）「問題は我々が政策の精神を深く理解していないことにある。」（㈫馬烽）「作家の中には何の意味もない

下らない人物，下らない事件，下らない自然を熱心に描くものがいる。これは文学を狭い世界へ導くだけである。」（㈫唐因）

前期の座談会でも反対意見は多く，次のような見解も見られた。「時代は発展し，現実生活は発展している。作家も時代の歩みに遅れることなく，絶えず現実を認識し，反映しなければならない。自分が熟知し，社会的意味もあれば当然書いてよい。自分が熟知していなくとも，重大な社会的意味を持つ生活であれば，熟知するようにし，極力正しく描かねばならない。それは時代が作家に課した要求であるから。」（「“写自己所熟悉的”小議」程継田）[15]

しかし後期の座談会は，既に攻撃目標が決定していて，それに集中攻撃をかけているような印象を受ける。これは，前期と後期の座談会の間に，「苦恋」批判を中心とする締めつけがあり，≪文芸報≫の唐因や唐達成が自己批判していることと係わりがあろう。前期の時期は尚四分代を頂点とする自由の空気が残っていたが，後期の時期は一連の締めつけがあり空気が一変している。引用した唐因の発言などは「角落文学」の全面否定に近いが，自己批判故の威勢のよい発言であると理解したい。

次に，座談会の持たれ方について簡単に見ておこう。㈦の座談会を例にとると，第1段階は中央文件の学習と地方の責任者による農村情況の報告とからなる。第2段階は地方の先進地域の訪問と社員に対する聞き取りとからなる。第3段階は学習と訪問を踏まえた農村題材小説の討論である。この座談会は前後11日間と比較的長いが，座談会が1週間以上にわたるものはほぼ同様の段階を経ている。㈠の座談会では更に第4段階で各作家の作品を取り上げ，長所，短所，問題点などを指摘したという。㈫の座談会は第2段階の訪問は省略されていたようだが，第1段階の学習については，中央1号文件と万里の講話，杜潤生[16]の報告及び県委書記による農村情況の紹介がその中身であった。

座談会の出席者について見ると，㈫の座談会のように大規模なものになると，全国17の省・市・自治区の作家，評論家，中国文聯，作家協会の責

任者，編集者から，主催者の≪文芸報≫≪人民文学≫関係者と数多い。前述した(チ)の座談会では，全国各地の作家，詩人，開催地の指導者，省・地区委員会の宣伝部，地区文化局の指導者と主催者作家協会湖北分会関係者である。

座談会と称するものの，普通の座談会から想像されるものとはかなり異なっている。第1段階は学習会或いは報告会であり，生産責任制の成果や多角経営の例を通じて変革中の農村イメージの徹底化がなされたものと思われる。第2段階は現地視察であり，モデル農村或いはモデル農民を訪問し，自分の見聞を通して変革中の農村を再確認する作業なのであろう。第3段階は学習会と現地視察の成果を踏まえて変革中の農村を如何に表現するかという問題であろうが，それは三章から見てきた問題でもある。開催期間の長さなども含めて考えてみると，多くの農村題材小説座談会は，学習会或いは研修会の合宿のような性格のものであったと思われる。

深入生活の提起も度々繰返されている。(イ)の座談会では深入生活に伴う困難を数点挙げて，その解決を求めている。1981年には，一覧表にも記したような深入生活の記事が目にとまるが，これも中国各地で実行された走馬看花式の，或いは下馬看花式の深入生活の一部であろう。1982年の「文学創作座談会」（中共中央宣伝部）では深入生活に言及し，「若く健康な専業作家は皆長時間かけて本当に深入生活し，“四化”建設に参加し，社会に学び，大衆と結びつかねばならない。自分の常駐する“根拠地”ができてからも，点と面を結びつけ，全力で自分の生活の視野を広げなければならない。」と，深入生活の義務化にまで及んでいる。深入生活の方式も徐々に煮つめられていたようで，1984年になると，中国作家協会工作会議は三種の方式を示している。

(1) 長期滞在――住民票を移し，当地で仕事を受持つ（高暁声，陸文夫，楊潤身等）

(2) 長期の生活基地――基地を離れても常時連絡を保つ（劉紹棠，浩然等）

(3) 短期訪問

深入生活は年と共に組織化されている。しかし，作家の事情や受入れ先の事情やその他各種の事情には配慮しなければならないと，慎重でもある。

七

前期の座談会が開かれた背景には，「新旧交替の，社会大変動の時代」という認識がある。括弧つきの言葉の意味しているものは，混乱でしかない。1979，80年と，農村では生産責任制の可否をめぐり激しく争われていたという局面があり，各地でそれによる非喜劇が生じていた[17]。生産責任制が農業政策の決定に先行して実行されていたという事実は，その混乱を更に助長させたと思われる。前述したように，文芸工作者は出来合いの答案すら提出できなかったのであるから，「出来合いの答案を受入れるのに慣れた」作家が農村題材小説を敬遠したのは当然であっただろう。座談会が開かれた背景には，この農村題材小説の沈滞ムードを打破し，作家の消極的態度を改めさせたいという文芸工作者の思惑があったのではなかろうか。農村が混乱状態にあればある程，たとえ政策図解化した文学作品であれ，生産責任制の正当性を唱えれば，それはそれなりに宣伝作用を果たせると文芸工作者が考えたとしても不思議ではない。題材は生産責任制に限らず，ほらこの題材もありますよ，あの題材もありますよというのが題材拡大の提起であろう。（それが，農村の諸問題の発見にまで進展するのは文芸工作者の意図を越えるものであったかも知れない。）

しかし，農業政策の確立とそれに伴う「自給・半自給経済から大規模商品生産へと発展する」過程という認識を持つ後期の座談会の時期には，その目的に変化はないものの，文芸工作者の攻勢が目立つ。学習会或いは研修的座談会は強化され，作家の創作の自由は制限され，深入生活の組織化は進められる等，作家は否でも応でも変革中の農村を描かざるを得ない立場に追い込まれている[18]。文革中の運動文学とどこが異なるのであろうかという疑問を禁じえない。鄧小平の提起した社会主義新人を初めとして，文

学の功利的側面を重要視する文学観がなくならない限り，運動文学は繰返されることになるのだろう。

注：

① 掲載雑誌により，農村題材短篇小説座談会，農村題材小説創作座談会，農村題材短篇小説創作座談会と名称は多少異なるが内容に違いはないようである。

② ≪文芸報≫1984年第7期によれば，3月以降座談会を開催したのは，上記以外に，作協山西分会，山東分会，湖南分会，北京分会，安徽文聯，福建省委宣伝部，≪山花≫≪小説界≫編集部等がある。

③ 家族で生産量を請負う方法と，家族で経営を請負う方法。

④ 1980年9月27日　中央75号文件。省・市・区第一書記座談会の討論紀要。

⑤ ≪安徽文学≫ 1982年第3期。

⑥ ≪文 芸 報≫ 1982年第5期。

⑦ ≪人民日報≫ 1980年7月16日。

⑧ ≪江淮論壇≫ 1980年第3期（復印報刊資料）

⑨ ≪文 芸 報≫ 1984年第8期。

⑩ ≪文 芸 報≫ 1984年第4期°

⑪ 例えば「農村的変革与文学的歩伐」（≪長江文芸≫ 1984年第4期）等。

⑫ 「"冲進去" 与 "逃出来"」葉文玲 ≪文芸報≫ 1984年第7期。
「听命于生活的权威」張一弓　≪文芸報≫ 1984年第6期。
「眼睛往哪里看？」葉蔚林　≪文芸報≫ 1984年第6期。

⑬ ≪文芸報≫ 1984年第5期。

⑭ ≪文芸報≫ 1984年第6期。

⑮ ≪汾水≫ 1981年第5期。

⑯ 中央書記処農村政策研究室主任。

⑰ 張一弓が度々書いている滞在先での事件もその一例であろう。これが動機となり，彼は「趙鏹頭的遺嘱」を初めとする現代農村物を手がけ始めたようである。

⑱ (ヌ)の座談会で，浩然が二年間精力を注いだ長篇小説の創作を中止し，農村題材小説を描くと決意表明したのもこの一例かと思われる。